

消々朝暮錄

一

特別
14
1919
156



○文運の開々々々々々紙の需用の大方は増加した
 のを以て其の由を尋ねるに西洋紙の
 産地を我國の紙の産地と流し
 行く度法を以て其の便宜のありきと決
 りしきとす
 全体を以て國産の紙と西洋の紙とを
 其の便を以て其の由を尋ねるに西洋紙の
 産地を我國の紙の産地と流し
 行く度法を以て其の便宜のありきと決
 りしきとす

とくまのふが紙のいときも破るま後るべき出さ
きふのしつとあまのま

現る又那のいときも早くころと我四の刀剣、精
を認るるま紙の美を認る是初我四の或
るは紙文したることらあは是初氏の宗則ら又那
の時代は我うその式も後多紙を認るる
事録るもる文就る紙を認し得るま家
ひあ

我四の三流ふ紙を道を出したるを認る方たさ
きふあ、即ち延喜の頃とまを大人か考を道し
ころと紙ま、延喜式もるまあはるるま



即ち麻布紙、麻皮紙、穀紙、檀紙、斐紙ま
その紙ま北ころまんまままころま言用
修せんまそつらつら

麻布紙とまのまそのまもま麻布とまつて作
つに紙まま紙ま立今とまつて用いたのま
麻皮紙の紙まあ、穀紙とまのま檀紙
まのま紙のま、檀紙
まの紙の紙をつてま紙
蘭のま紙のま向まなま紙
まの紙とまのま又斐紙ま其花
の紙ま紙まをつてあへた紙の紙

の形をばらばら

日本に於ける紙の行をばらばら何れをばらばら何れをばらばら
の大体を以上とせしむるのまじりたるはばらばら
は日本に於ける紙の行の由りて貴まんとせしむる
他の紙の行の紙の行をばらばら何れをばらばら
紙の行の紙をばらばら何れをばらばら
そのことを思ひて紙の行の由りて早いに
のまじりたるを得ま

の論はゆがむの由りて早いに文方の精巧を得
るんばらばら何れをばらばら何れをばらばら
めよめよ何れをばらばら何れをばらばら

くの紙をばらばら

日本に於ける紙の行の由りて早いに文方の精巧を得
其の由りて早いに文方の精巧を得
と推測の由りて早いに文方の精巧を得

後世徳の氏よるるは紙の行の由りて早いに文方の精巧を得
つまむの由りて早いに文方の精巧を得
ある日とて早いに文方の精巧を得
いふに於て、紙の行の由りて早いに文方の精巧を得
あつたは紙の行の由りて早いに文方の精巧を得
と稱するは紙の行の由りて早いに文方の精巧を得
を指すは紙の行の由りて早いに文方の精巧を得

その由りて早いに文方の精巧を得

い少細るに滞りしことあるを自白せしむ、即ち集
 むる運材のなるん 何れも立、れりこことさるる具
 ち自ら心んを 鉄鉋の敷と集め、鉄と
 辛やれを老い得るんが 鉋をせり法とて
 入難く、いろくろくを 滞りしと終るの
 境もあつちあるに 如末、ち細を細く
 纏も起しん 垂りわう久敷とてくも、こんを
 又んは終らん一旦 此の事と滞りしことあ
 りも事實と又んを、又此地中と後して
 而もあろくもえんを、この二三とあす
 一但練とは中の漢字楚功も其人材を



論もあつち一言も、而して其一言の義も
 活大、作用流俗、人をも達するもあつち
 ハ決して説改するも、人をあつち
 回く、人才能は、此の目的もあつち
 一竟天下を行ゆ、禪りて、許由こんを受け
 たりし、は後世の人、功をあらしとて
 其論もあつち、あつち、陳眉公は、あつち
 堯の命と盡大地是洪水、盡大地是獸
 蹄鳥跡、其の水土の漸く平、つるを得ん
 民も徳を教くし、あつち、洪水の天地
 かに一片乾坤の草、行をも具、得ん

何をも受用のこともなしん天子の尊き
も茅茨草草に撲角断ると、銅管の食
聊う以て餓ええし、麻衣の衣聊う以て
寒を凌ぐ、惟天下の樂みを喜ぶる無き
うもなきが、且天下の憂を業とらざるん
るも竟の聖と三拜の星も固く其の
宜のみ、許由又何の艶羨も所あること之
を受けんやと、皮肉なる論といふへきこと
而もなきことと、而もけんが軒高なること
軒高なる此の論、これ余の論とて
くへきの又

一 林和靖といふ人皆清高の隠士其徳を
仰慕するきやうの人とておとふ、その客の
西湖の園をおし来りしものをも、其園に
山の下樹下出家の家と題して林高士堂
とありけんは、和靖快然とて釣きし
と美、其提子と題して能くさうしこと
いふこと
○ 和靖の事をお説くことなきも其の技の妙は
遠くはるかに其の功果は思ふ所をぬくこと
いふこと、桑なる人仲の掬むる別のこと
即ちいふ、露伴の信楽施話は入仲の美

材と銘しを左にめぐらして

聖原君仲依移を物次り、九世高桂のつ人き
ふ海返の徳をうもる人勝ることを歌をい
言桂を安を興つんとてんを辞して受けん
四あふせんしを名をきりて、而して人の書る
ところの橋狩回ち別、別とけきしを馬を
終つて後をえんぬぬ盤上の馬のそいひ方
自く大のよとあふちを様子のねをまじ
井桁のねをまじりて、或るや馬の表
裏をうつて見ゆ年の月々の大いを取らすあ
る人をもしを悟んて、其巧思の非を欺く

東林居士

と嘆せしむ、其書を物次り抄めといひて今
に存す

○日果の園語の園語を著せしと古来、乃今海
山あり、石滑り私を著とそあな(中)の心を
深きなる、~~物次り~~と命よ此にふあは、佐の書
物の割合を多くいのかを記さるるが、情し
いこととて刊行をあらうが著者の道に、唐に後
めらんたこの、いみぢなるり傳はらるる
このが、~~物次り~~ 鮮くさるる、~~物次り~~
~~その書~~ ~~物次り~~ ~~物次り~~ ~~物次り~~ ~~物次り~~
とていふる、大なる心を出版した園語

この書目解説は、按ずると、今頃のこの本の傳はつて
あつたものと見る程であるが、按じ、此外本を傳
はつてそのまんじ書名の傳はつてそのもの。

七あつて、即ち双方を合するも

佐々木

序の記しと、その記し、此の書おと、其の記し、
う、主換と、その記し、此の書おと、其の記し、
廿三、その記し、伊達、其の記し、
も、初め、その記し、其の記し、
此の記し、その記し、其の記し、
その記し、その記し、其の記し、
大、その記し、その記し、其の記し、

東洋書院

め、漸やく、此の書の刊行を、その記し、
る、勿論、其の記し、其の記し、
彼の、その記し、其の記し、
研究、その記し、其の記し、
し、その記し、其の記し、

法典二十則

の樽樽子酒を志む〜店をあらためて飲むを志ふ
律にえきひ多く〜送附の海ある
〜
本多敷本多敷の酒を中念ひ辞し〜
故令する如人と酒の二つを催して飲
む酒を志ふ〜

○酒を飲進つて書き受めぬと推し〜
酒の〜を志ひ出し〜
を志ひし酒の酒を〜
この酒は〜

東林堂

おし〜
手也の言を推し〜
其の味と酒とを〜

○相合お散ある〜
酒を志す〜

長ふらあふ、而して此の事なき白人とあつて
ひあふ事にも先法親河海のてらあふ
ひあふ

○親河海とてあふぬわの江尾才一等の料
地をとりて貴人あふ人うおとせえんれ望
樹のまへにあふ、望樹様を父とせえんと
その料地をぬりて京山の蜘蛛の糸まきとあひ
あつてあふ事、きうくく西尾の家ひあつて
とつてあふ

ぬわの江尾河洲海とせえ親河海とていし
料地をぬりてあふ事、親河海とていし



そのけしとて京河海とていしぬわの江尾
夫婦人の扱をぬりてあふ事、あふぬりて
あふ事、あふ事、二間の床、高橋様を押し
側付を廣きなり、二の間、三の間、二を
かこい、中のおき、又とあふ事、鞠場
あふ事、中のおき、あふ事、雲州の御
事を南海殿あふ事、御事、御事、御事
男雲の殿あふ事、あふ事、あふ事、あふ事
殿あふ事、其の大名のあふ事、雲の殿あふ事
紋川地のあふ事、川とてあふ事、お殿、あふ事
こおき、あふ事、あふ事、あふ事、あふ事、あふ事

一茶目はひるまき、そ及西洋料理の卓上
味は清味酢や葡萄酒胡椒味のものを
きりぎりすを自ら塩梅せしむること
いふ我邦は古きとんを同様のことを
門家の錫封をあたへて人の羞酒飲儀の
條は高杯十二本の圓を以て一の杯二の杯を
と味略鹽酢酒を兼る四品をそえり
又厨事勢にゆる酢酒塩・油・醬（きりぎりす）も
利も利と大を賣る汁とて其を鹽を
煎る汁とてとることを生る四種の汁と
名けりて、鹽をゆつて洗つる汁と

○今の人を有と魚とをいふるを漢語者
の言の凡非穀而食曰肴と曰ふこと、その
海味とていふる蔬菜とも肴ともいふこと
事海味も同じし事をいふ酒の味もいふこと
みよ酒菜といふ酒の肴といふこと
いふことと又楊屋は事といふこと
一層もいふこと
世俗に之の菜は酒とて清の他々の扱の
も我も酒とていふこと、菜の味もいふ
こと、酒の味もいふこと、菜も又酒
の味もいふこと、田圃は酒の味もいふこと

吾らとてしる谷の底に暮らさるる

是もとて暮らさるる我らもまた谷にたつる

こしの山おひ

拙心もいふ言候ふればあつた

北嶺うちこし四里山径隆嶮と数武七平

垣の路を幾多浅見といふ所なるは猶二辰

嶺にてもを過て三俣といふ山驛なるはし芝原

嶺をちよ湯ぼる持んともる途を途二楹

の茶店を免る庇のともる床あつると浅きお

やうのここのま向う方さるおと茶をさるる途目

るらん石花菜とさるる途目口をさるる

あとおひいさるる七山をばるるるあもさげ

しく汗もあどいさるるつらんなるは茶店

あつたつらんしく茶店をさるるはしこ

と腰をうけつるの白きおをさるるはところ

人うさあつたつらんしく六月の氷を

みさるる六月の目さるる最敗しけんはまよ

うらと、秋夜は深さ五寸許の茶もあを入

れ、その中さふき踏石は雪のめを、まをい

けると茶葉は、開か、こんと山麓の谷にあ

つらつら、あしなまはつた、まをんとつら

はとて、をいけんは、あ茶のとおも、茶の

その後々甲如の四都留印を鑿する所あり
玉づきを以てその紙を圓の如くおさるる。その
中へ往々の物品を入るる心を以ておさるる
たしくば、菊、菊、松、竹、梅、入ておさるるは、字
表、約つといふ事、又菊、菊、系るんば、分、板
く、その事、草、草、ハ、流、端、備、ハ、不能、流
る、その事、その村、その由、その、ハ、異、あつと
長、大、その事、因、いと、その、母、ハ、ハ、ン、ジ、モ、ノ、と
つ、その、如、お、さ、る、る、事、ハ、女、術、あ、つ、と、
玉、様、の、名、あ、つ、と、さ、る、事、ハ、玉、様、の、名、借、り、と、
父、マ、は、又、マ、サ、カ、ハ、父、マ、マ、マ、サ、カ、の、義、と、さ、る、事、ハ、

東洋の

く、その心を以て、その義、と、さ、る、事、ハ、ツ、サ、は、寸、々
を、ス、メ、ス、タ、と、訓、ふ、事、ハ、玉、様、を、ツ、サ、と、ス、サ、と、
印、を、細、く、断、せ、る、品、を、入、る、事、ハ、由、り、と、マ、
ツ、サ、と、い、ふ、事、ハ、その、事、ハ、女、術、と、い、ふ、事、ハ、

○並、西、瓜、と、書、く、カ、ボ、チ、ヤ、と、書、く、事、ハ、
東、洋、の、事、と、い、ふ、事、ハ、東、洋、の、事、と、い、ふ、事、
と、い、ふ、事、ハ、東、洋、の、事、と、い、ふ、事、ハ、東、洋、の、事、
ハ、何、れ、と、い、ふ、事、ハ、東、洋、の、事、と、い、ふ、事、
言、ふ、事、ハ、東、洋、の、事、と、い、ふ、事、ハ、東、洋、の、事、
と、い、ふ、事、ハ、東、洋、の、事、と、い、ふ、事、ハ、東、洋、の、事、

寒七丈の一名であるそうは、此の雪を来々々
を四や一の字をとりてる。其の保の
以まんをトント見えさうつ。此の雪を来々々
うふ

○日本の雪は江戸の雪味より乾く。其の雪を来々々
入連色工字士の江戸はアイヌ流のエツトハ突
出物、鼻端又ハ脚角を意味する。其の雪を来々々
ある又大坂の古名いかにをばさかを来々々
アイヌ流のピリカ、オウサカ、其の雪を来々々
口の乾くを意味する。其の雪を来々々、一説に江戸は
アイヌ流のエントから出たといふ。エントは植物

東林堂製

その上唇外科に属する香茸(?)のアイヌ名は地
草と云ふ。或は雪の山草と云ふ。其の雪を来々々
うふことば、何れも雪の味をいふ。アイヌの雪
味を来々々。其の雪を来々々。其の雪を来々々。其の雪を来々々
わち流るアイヌの目太極。其の雪を来々々。其の雪を来々々
いふ。其の雪を来々々

○又日本の雪は江戸の雪味より乾く。其の雪を来々々
入連色工字士の江戸はアイヌ流のエツトハ突
出物、鼻端又ハ脚角を意味する。其の雪を来々々
ある又大坂の古名いかにをばさかを来々々
アイヌ流のピリカ、オウサカ、其の雪を来々々
口の乾くを意味する。其の雪を来々々、一説に江戸は
アイヌ流のエントから出たといふ。エントは植物

川（礮考）ブタ（河川）ひきこりかとの物づら
 るをきき又関市の房館を潤す利根川の利根
 はアイヌ流のタム子ひきこしとよふ義とよふ
 ともてテ子ひび低窪卑遠の地とよふよとよ
 流もあす

○日本の文やさるるあかひのあつむ豊田字とよふ
 とよふ田の人の花しき^{（花）}豊田のあつむは
 見えぬいふのむひあす^{（）}るな^{（）}の^{（）}さ^{（）}は
 ふる豊田の印杵町大友氏とよふとよ^{（）}上^{（）}記
 とよふあつむあつむのむひあす、あつむのむひ
 のあつむとよふあつむのむひあつむのあつむとよふ

ア	ア	ス	ラ	コ	カ
改	改	木	緑	子	改
卍	卍	巾	居	卍	卍
刺	刺	巾	居	卍	卍
田	田	乳	粒	戸	田
魚	魚	荷	沼	野	魚
か	か	火	緑	穂	か
葉	葉	身	蒸	漏	葉
眉	眉	射	湯	夜	眉
矢	矢	針	見	幌	矢
腹	腹	居	生	絞	腹
輪	輪	井			輪

ど遠東流方とよふてなむた文やあつむのさし
 ありあつむをいへんば一概に傍流とよふ
 可くともいへん即ち日向の山あつむのむひ

豊後守尾山後山の字 紀伊高川の字 百重を井
村の字及び琉球宮古島の字をいんとす
ふしつ

今尾平山 孤く高川の字を圓して尾平山
きく其石段を云ん。尾平山のまじりて豊後守
直入即尾平山とす。石刻字の事。上尾平
山。尾平山の後。たふす。後。尾平山とす。
山中。後。穴を築きたるとす。此の。尾平山と
其子。後。刻字。尾平山。尾平山。尾平山。尾平山
其子。後。刻字。尾平山。尾平山。尾平山。尾平山
其子。後。刻字。尾平山。尾平山。尾平山。尾平山
其子。後。刻字。尾平山。尾平山。尾平山。尾平山

東林院

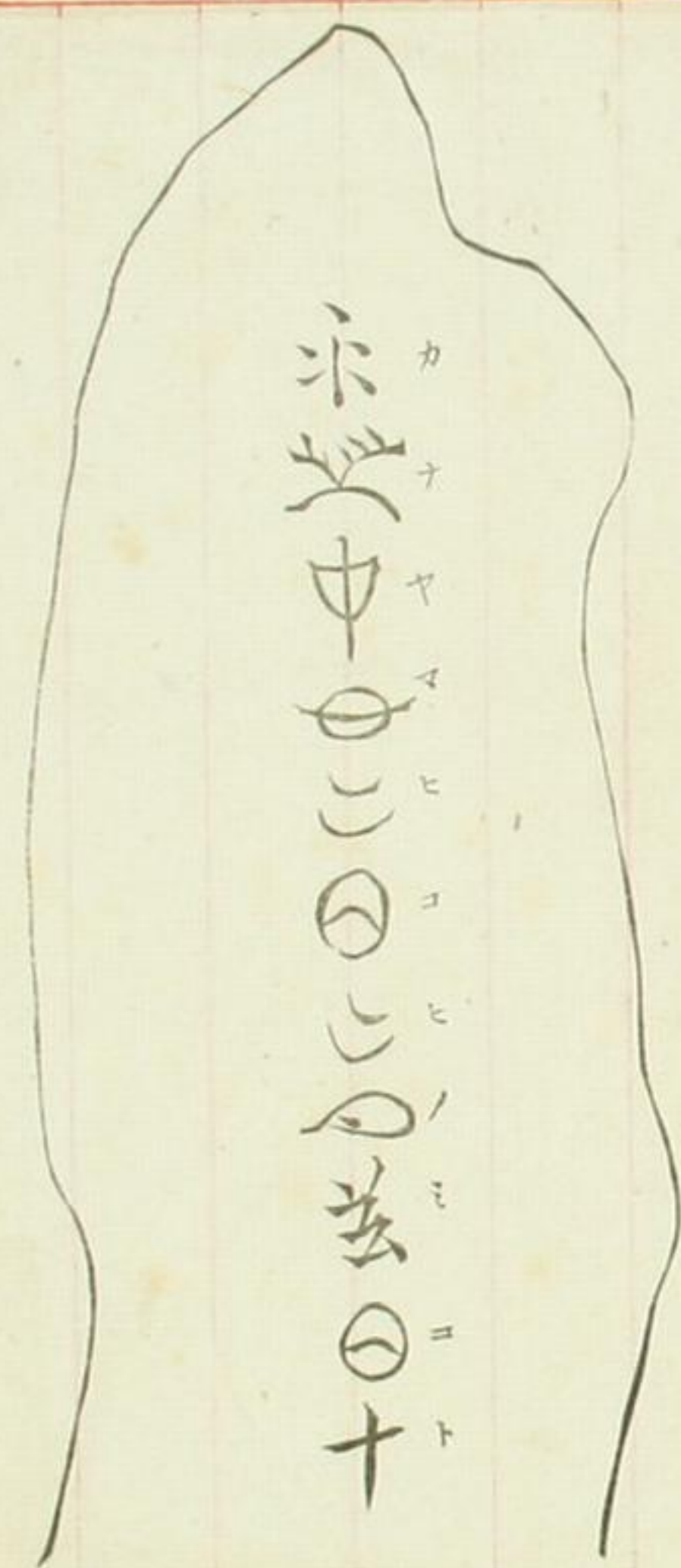
金山三尾炬余

ひま

又紀伊高川仙人谷の古字といふ。オ二四の如
く。尾平山の字。二月廿日。西京。尾平山。尾平山
山。尾平山。尾平山。尾平山。尾平山。尾平山。尾平山

尾平山

石刻字



金山三尾炬余

まうとある

まうの正南の南州仙人谷より一尋石を掘り此石
の如しある土人仙人の石といふ此石上に出る石
総一尺許り一尋石を掘り解する石



仙人 石を掘り此石を掘り
谷 といふ石の如し何
古ま 石を掘り此石を掘り
か自ら風を砂を

掘り此石を掘り此石を掘り

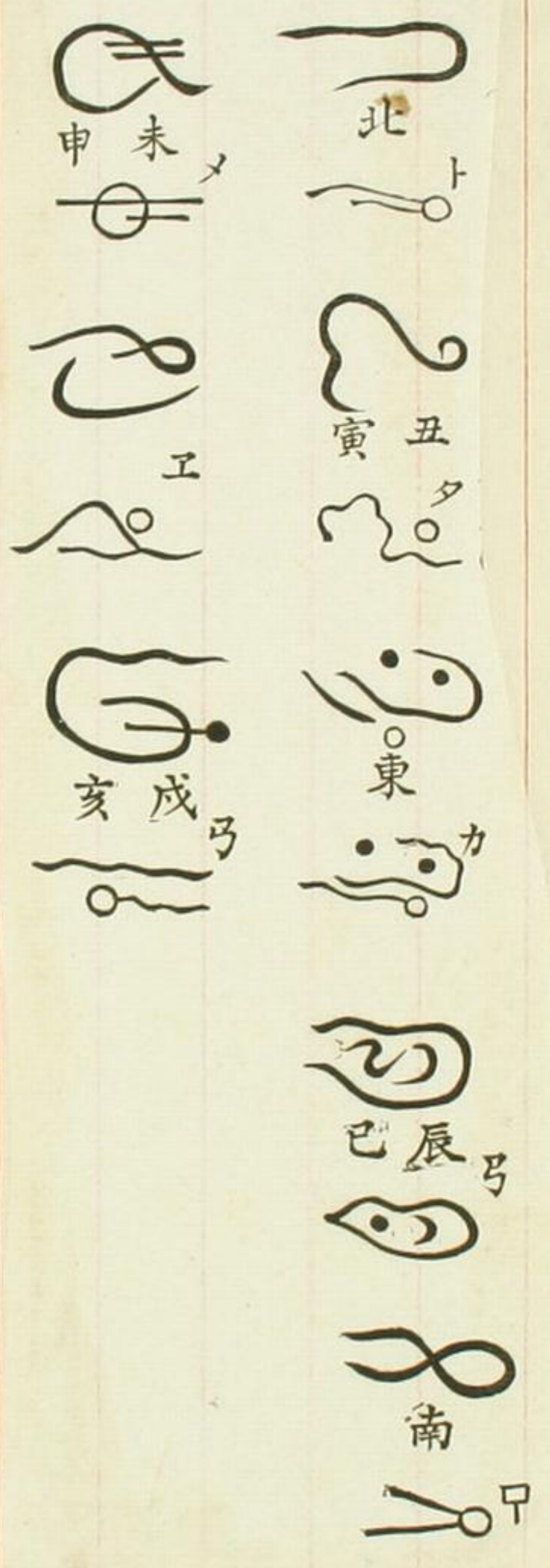
北の山より此石を掘り此石を掘り
此石を掘り此石を掘り
此石を掘り此石を掘り

仙石

とぬけしと、後谷の石を掘り仙人の石を掘り
とぬけしと、後谷の石を掘り仙人の石を掘り
とぬけしと、後谷の石を掘り仙人の石を掘り
とぬけしと、後谷の石を掘り仙人の石を掘り

此石を掘り此石を掘り
此石を掘り此石を掘り
此石を掘り此石を掘り
此石を掘り此石を掘り

とあるところを、其國の風土のよきよき
 ところを於て、或は、或は、或は、或は、
 滑る、滑る、滑る、滑る、滑る、滑る、
 ○平田馬場、北字の文、係の、係の、係の、
 多岐の、多岐の、多岐の、多岐の、多岐の、



東洋風

大和國法隆寺所傳也。本國白川平久進所傳也。
 其即法隆寺所傳也。上宮子御座人(文信
 の歎き)の、歎き、歎き、歎き、歎き、歎き、
 國とは、法隆寺を、法隆寺を、法隆寺を、
 歎き、歎き、歎き、歎き、歎き、歎き、
 書、書、書、書、書、書、書、書、書、書、
 書人の、書人の、書人の、書人の、書人の、
 外、外、外、外、外、外、外、外、外、外、
 此、此、此、此、此、此、此、此、此、此、
 法、法、法、法、法、法、法、法、法、法、
 即ち、即ち、即ち、即ち、即ち、即ち、即ち、

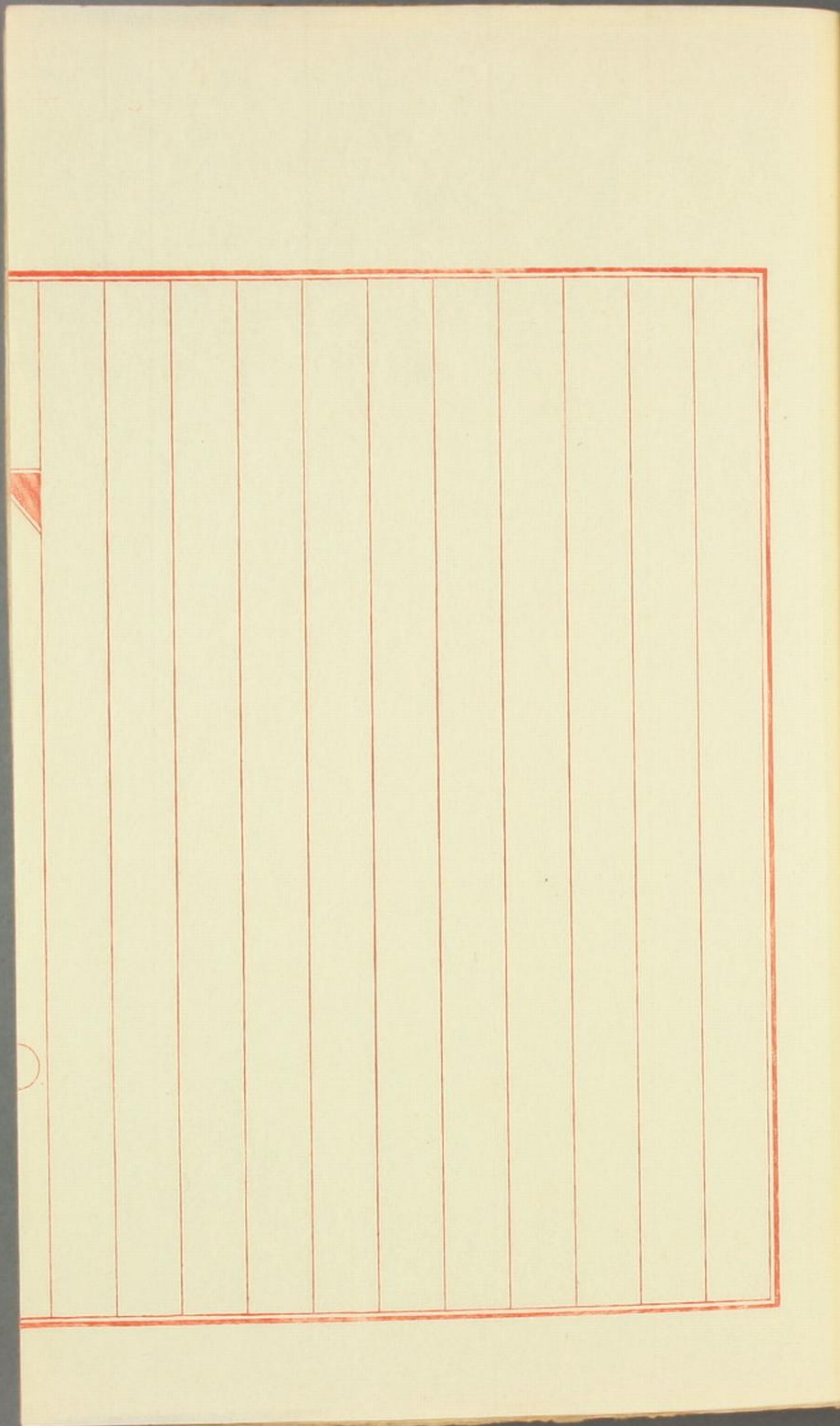
支那通阿知守數齊數南同同田數券

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一	十一
十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二	十二
百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百
千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千	千
万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万	万
億	億	億	億	億	億	億	億	億	億	億	億

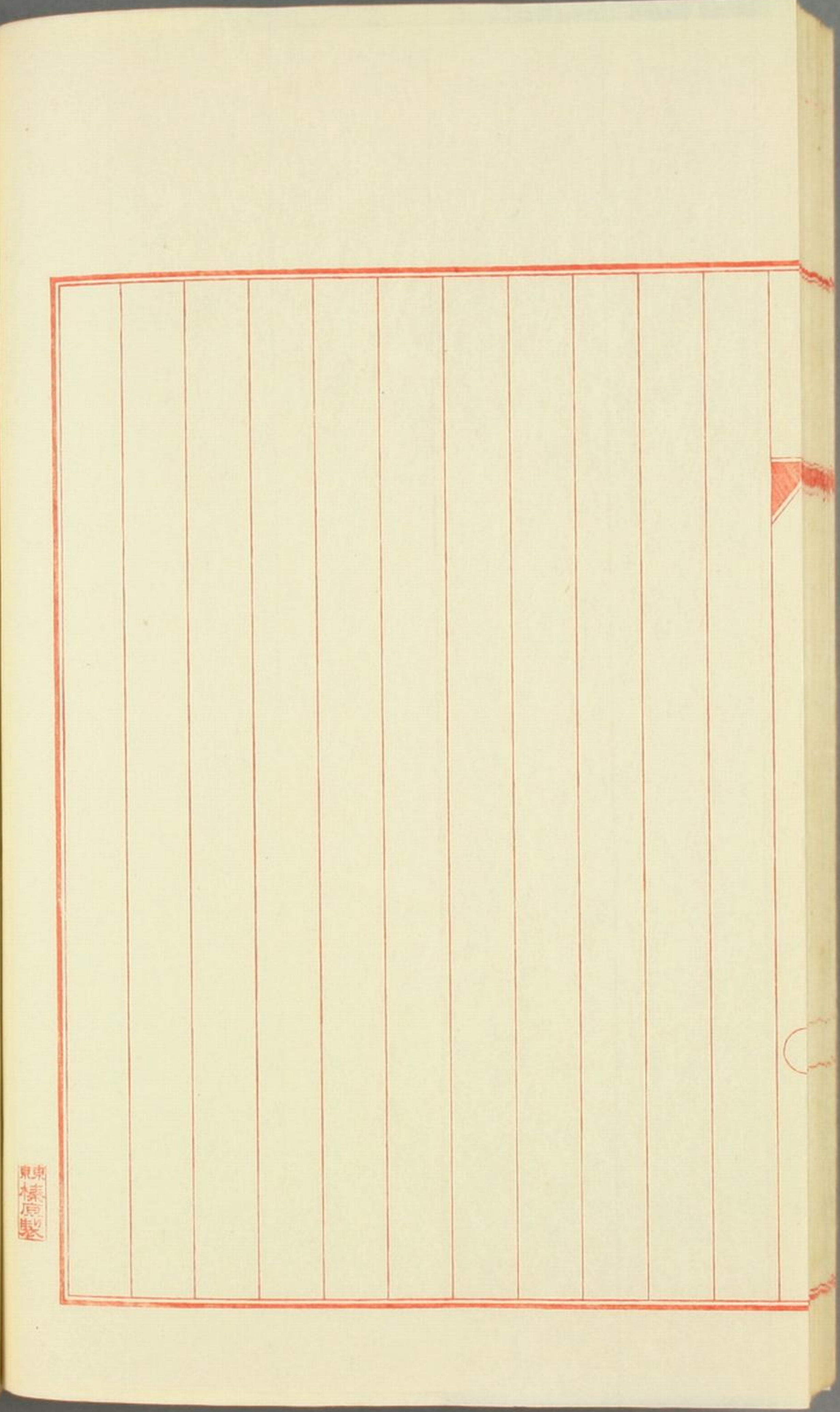
このあつと 阿系伊知教よととと 阿系伊知和名
 ありまの候 和名世も とつととつ アナイケとつ

うしとまづが北斗星を畫きまは北といふ意を示し
 旭日を畫きまは東といふ意を示し日のよくとまは
 う候を畫きまは南といふ意を示し日のよくとまは
 一候を畫きまは西といふ意を示し、さそ其の中
 間をえりて 乾坤巽艮といふ意を示しとと
 上言ふ子の自あつと、あつとをいんんとも 洗
 してその凡の之えとあつとをいんんとも
 〇古来我邦へ行くとと教字の行候とて支那教字
 への阿系伊知教字守垣教字齊部教字
 守印層教字の五候とて符
 徴めるとまはととと 羅馬教字と大回ヤ吳の

東洋書院



東洋製



以下全て
白紙

明
治
三
十
六
年
九
月
下
浣
於
牛
山
僑
居
春
城